

令和 3 年 6 月 4 日現在

機関番号：12701
 研究種目：基盤研究(C)（一般）
 研究期間：2017～2020
 課題番号：17K02847
 研究課題名（和文）学部・留学生教育研究のためのアカデミック・ジャパニーズスピーキングコーパスの開発
 研究課題名（英文）Development of Academic Japanese Speaking Corpus for research and pedagogical purposes
 研究代表者
 半沢 千絵美（Hanzawa, Chiemi）
 横浜国立大学・国際戦略推進機構・准教授
 研究者番号：10734139
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本語母語話者および日本語学習者の意見陳述発話および説明・経験談発話を収集し、データをコーパスの形で公開すること、および日本語母語話者と学習者のアカデミック・スピーキングの特徴を明らかにすることを目的とした。2021年3月時点で98名分、947データを公開し、コーパス（Webベース）に登録すればだれでも使用可能となっている。収集したデータの分析によって、意見陳述の談話構成、譲歩表現、意見陳述の際の緩和表現、接続詞の使い方に関しての日本語母語話者と学習者の特徴の一端が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義および社会的意義は、研究目的にそって二つに分けられる。まずはコーパスによるデータの公開である。発話コーパスは現在様々なものが公開されているが、独話の意見陳述および説明・経験談発話を収録しているものはほとんどない。本コーパスの、条件が統制されたもとで収集された発話データが研究・教育目的のため、研究者および教育関係者に広く利用が可能となった。二つ目は、アカデミックスピーキング研究への貢献である。学習者の意見陳述や説明・経験談の分析により、効果的な教材開発、教授法の開発へとつながる基盤を構築することができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is twofold: The main purpose is to create academic speaking corpus which consists of opinion-statements and descriptive and narrative statements. As of 2021 March, data from 98 people (947 statements) are uploaded to the web-based corpus and can be used anyone who registered with the website. The other purpose was to analyze the collected data. The data were analyzed in terms of structure of statement, concession expressions, hedges in opinion statement, and use of conjunctions and so forth. The analyses revealed the learners' characteristics on those elements.

研究分野：日本語教育、第二言語習得

キーワード：日本語教育 コーパス アカデミック・ジャパニーズ 発話コーパス 第二言語習得

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年、国内の大学・大学院で学ぶ留学生が急増したため、アカデミック・ジャパニーズの指導の必要性が高まっている。しかしながら、アカデミック・ジャパニーズの研究や教材開発は作文やレポート作成などアカデミック・ライティングの分野での発展が中心であり、アカデミック・スピーキングの使用実態についてはほとんど解明されていない。英語のアカデミック・スピーキングに関しては、Michigan Corpus of American Spoken English (MICASE) など、身分、母語、専門分野、状況別で検索可能なデータを対象とした大規模コーパスが作成され、インターネット上に公開されているが、日本語にはそのようなコーパスは存在しない。

さらに、日本語学習者だけではなく、日本語が母語である日本人学生のアカデミック・スピーキングの実態についても解明が進んでいない。初年次教育等でアカデミックスキルの重要性が強調されつつあり、プレゼンテーション等の指導が行われている場合もあるが、日本人学生が授業やゼミ、教員との会話の中でどのように自分の意見を伝えたり、読み聞きした内容を要約したりしているかなどは明らかになっていない。

これらの状況を考え、学習者と母語話者に同様のタスクを与えて収集した発話データの収集し、これまでの話し言葉コーパスでは解明できなかったアカデミック・スピーキングの特徴を調査する。

2. 研究の目的

本研究は、アカデミック・スピーキングデータの(1)収集とコーパスの構築、(2)収集したデータの分析を主な目的としている。以下に具体的な目的を示す。

- (1) 大学や大学院などのアカデミックな場面を想定し、日本語母語話者と日本語学習者が使用するアカデミック・スピーキング発話を収集し、コーパスとして広く公開し、教育および研究目的での活用を促進する。
- (2) 収集したデータを分析することで、日本語母語話者と日本語学習者のアカデミック・スピーキングの特徴を明らかにし、アカデミック・スピーキング指導のための教材開発や指導方法の基盤を作る。

3. 研究の方法

(1) 意見陳述、説明・経験発話の収集と公開

本研究では、アカデミック・スピーキングを、大学や大学院など、アカデミックな場面を想定した日本語母語話者や日本語学習者の発話と捉え、具体的に「意見陳述」「説明」「経験談」の発話データを収集することとした。データの収集は、あらかじめ用意した質問に回答をしてもらい、その音声を録音するという方法である。データ提供者は、日本語を母語とする大学生および大学院生と英語、中国語、韓国語を母語とする日本語学習者(留学生)である。質問は全部で50問準備し、一人あたり10問の質問に回答してもらった。データ収集は調査者が対面で行う方法と、PCを用いて一人でPCに向かって話すという二通りの方法を採用した。

データ提供者には可能な場合性別、年代の情報を提供してもらい、日本語学習者には、データ収集時の日本語学習期間と日本滞在期間についても情報を提供してもらった。さらに、学習者にはSPOT(Simple Performance-Oriented Test)を実施し、学習者の日本語能力を測定している。

(2) データの分析

収集したデータのうち、意見陳述データの分析を行った。文字化したデータを用いて、意見陳述の談話構成、意見陳述の文末表現、意見陳述の譲歩表現、意見陳述中の接続助詞や接続詞の使用などについて分析を行った

4. 研究成果

(1) アカデミックスピーキングコーパスの構築

収集したデータはWebベースのコーパス(<https://ascoe.jp/>)を構築して公開した。コーパスには「データについて」「コーパス検索」「利用者登録・お問い合わせ」「研究例」の見出しを設置した。利用希望者は利用者登録をすれば、コーパス検索ができるような仕様になっている。



コーパスでは、属性（性別、年代、日本語学習歴等）でデータ検索がかけられるほか、文字列検索をかけることも可能となっている。検索は絞り込みの方法を取り、絞り込みたい属性をクリックしていくことで希望するデータが表示されるようになっている。検索結果には「音声データリンク」と「テキストデータリンク」があり、テキスト（文字化）データは全員分が、音声データは公開可能なもののみダウンロードすることが可能になっている。2021年3月時点で98名分、947データを公開しているが、今後も継続してデータを追加していく予定である。

検索結果

検索結果:170件

検索条件:中国語,女性,56-80(中級)

協力者ID : C3, 母語 : 中国語, 性別 : 女性, 年齢(才) : 32, 年齢(代) : 30代, 学籍 : 研究生, SPOT90(素点) : 61, SPOT90(レベル分け) : 56-80 (中級), JLPT : N1, 日本滞在期間 : 6か月~1年, 学習期間 : 3年以上, 対面・PC : 対面, 質問 : A7,
[音声データリンク](#)
[テキストデータリンク](#)

はい、成功について、運が本当に必要と思います

あの、例えばさっきの話ですので、自分の先生のメールを送って、でも返事がどうか忘れ、おう、じんじ[返事]がどうかかわらないです、もし運がないから、多分、多分返事が一切ないと思います

えーと、もし、でも、先生の、あのメールでチェックの時間とか、自分のアピールの作る方[作り方]とか、いろいろの、あー、いろいろの、ほ、いろいろ方面が、あの、必要ですが、一番、あの、{笑い} 一番重要な運だと思います

はい、先生は偶然にメールを開けて、自分のメールは見てて[見てて]、あっ、ちょっと、えー、興味があるがなくて、返事すれば、多分成功かと思えます

(2) 意見陳述発話の分析

① 意見陳述の談話構成について

意見陳述の談話構成は、意見を述べる際の「主張」と「根拠」がどこであらわれるかを主な分析対象とした。半沢・金（2020）では、韓国語を母語とする中上級日本語学習者を対象に意見陳述発話を分析した。その結果、意見陳述の開始部と終結部両方に主張を述べる傾向は母語話者・学習者ともに共通していたが、学習者の場合は意見陳述開始時に背景情報のみが述べられているものや、意見陳述の中に主張が欠如しているものが見られた。横山（2016）では、英語を母語とする日本語学習者に対して同様の分析を行っており、その結果から学習者は意見陳述の開始部のみで意見を述べるケースが多くみられたと述べていたが、半沢・金（2020）で対象とした韓国語を母語とする日本語学習者の意見陳述の談話構成がより母語話者と近かったという結果は、学習者の母語が影響しているものなのか、学習者の日本語の習熟度の影響があったのか今後さらなる分析が必要である。今後の分析としては、中国語、韓国語、英語を母語とする学習者データと日本語母語話者の意見陳述の談話構成をこれまでと同様の方法で分析し、その傾向を分析することを検討している。

② 意見陳述の文末表現についての分析

半沢 (2018a) では、日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者の意見陳述の主張の文末表現に着目をして分析をした。その結果、母語話者には「～と思う」の前に「かなと」「じゃないかなと」「って(いう)ふうに」等、自身の意見をやわらげる働きのある緩和表現が用いられているのに対し、学習者の場合は「～と思う」のみで主張を述べているケースがほとんどであった。質問形式の違いとどのような関連があるかを見たところ、特に「～についてどう思いますか」といった、対処方法を問う質問に対して母語話者は頻繁に緩和表現を用いていることが明らかになった。半沢 (2018b) では、「～と思う」だけではなく、「～です」「～ます」といった言い切りの形で主張が述べられているものも分析対象とした。その結果、学習者の場合は「～と思う」を用いず、言い切りの形で自身の主張を述べる場合も多く、聞き手に、「これが唯一の解決方法である」「自分の意見は正しい」といった印象を抱かせる可能性もあることから、学習者が「緩和表現+思う」が意見陳述で使えるよう指導が必要であることが示唆された。しかし、実際に聞き手がそのような印象を受けるのかは聞き手の評価という側面からのさらなる分析が必要である。今後は「緩和表現+思う」がどのように習得されていくのか、縦断的な研究も視野に入れて調査を継続させていきたい。

③ 意見陳述の譲歩表現についての分析

半沢・横山(2017)では、日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者のデータを対象に、譲歩表現に着目をして分析した。譲歩表現を「自説と対立する立場に理解を示したり対立する立場に有利な情報を提示したりする箇所、および、自説の問題点や限界を指摘したり自説に不利な情報を提示したりする箇所(伊集院・工藤 2014)」と定義した。その結果、学習者にも譲歩表現が用いられていたが、母語話者には、相反する主張に同意して譲歩を表す機能が、学習者には自身の主張を限定したり弱めたりすることで譲歩を表す機能が多くみられた。また、母語話者は譲歩表現を含む場合でも、意見陳述の最後に自身の主張を述べる傾向があるのに対し、学習者の場合は譲歩を表す発話で意見陳述が終了しているパターンもみられたことが特徴的であった。

Hanzawa, Hatasa, Ito (2017) では日本語母語話者と英語を母語とする日本語学習者を対象に譲歩表現の有無を分析した。その結果、半沢・横山(2017)同様、学習者にも譲歩表現の使用はみられたが、意見陳述の終結部が譲歩をあらわす表現で終わってしまい、自身の主張が明確に表せていないなどの問題点が明らかになった。譲歩を表す表現については、アカデミック・ライティングの分野では頻繁に扱われる項目であるが、話し言葉では体系立てて教えられることがあまりないのではと思われる。「もちろん」「たしかに」「ただ」といった譲歩表現を示す際の表現を効果的に使えるよう教材に入れていくなどの工夫が必要である。

④ 意見陳述にみられる接続詞・接続助詞について

半沢・横山(2017)では譲歩から反論へと談話が展開される時の接続詞について分析を行ったが、母語話者の場合は接続助詞の「～けど」「～けれども」の使用が多くみられたのに対し、学習者の場合は、接続詞「でも」の使用がもっとも多かった。これは学習者が同一文内において譲歩から反論への移行ができておらず、単文レベルの発話に止まっていることが要因であることが示唆された。半沢・金(2020)では、日本語母語話者と韓国語を母語とする学習者データを分析したところ、意見陳述開始部で主張から根拠へ談話を展開する際に母語話者は明示的な接続表現を用いていないケースが最も多かったのに対し、学習者は「なぜなら」や「なぜかという」と用いるケースが最も多かったことが明らかになった。また、意見陳述終結部で主張を述べる際の接続表現に関しては、母語話者・学習者いずれも「～ので」等の接続助詞を用いて最後の主張へと談話を展開させているものが多かったが、「それで」等接続助詞のみで談話を展開させていたのは学習者のほうが多かった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 半沢千絵美	4. 巻 2018
2. 論文標題 意見陳述における緩和表現 質問の種類別にみた日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者の傾向	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Canadian Association for Japanese Language Education Annual Conference Proceedings	6. 最初と最後の頁 87-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Chiemi Hanzawa, Yukiko Hatasa, Katsuhiko Ito	4. 巻 2017
2. 論文標題 Analysis of concessive expressions in oral opinion statements by native speakers and English-speaking learners of Japanese	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Canadian Association for Japanese Language Education Annual Conference Proceedings	6. 最初と最後の頁 73-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 半沢千絵美, 金蘭美	4. 巻 7
2. 論文標題 韓国語を母語とする中上級日本語学習者の意見陳述の特徴を探る-談話構成と接続表現に着目して-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ときわの杜論叢	6. 最初と最後の頁 14-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件/うち国際学会 6件）

1. 発表者名 半沢千絵美・金蘭美
2. 発表標題 韓国語を母語とする中上級日本語学習者の意見陳述にみられる特徴
3. 学会等名 第35回韓国日語教育学会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 半沢千絵美・伊東克洋
2. 発表標題 研究・教育を目的としたアカデミック・スピーキングコースの構築とその活用方法
3. 学会等名 全米日本語教育学会（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 半沢千絵美
2. 発表標題 意見陳述における緩和表現 質問の種類別にみた日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者の傾向
3. 学会等名 Canadian Association for Japanese Language Education Annual Conference（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 畑佐由紀子・横山千聖
2. 発表標題 日本語母語話者と日本語学習者のアカデミック・スピーキングにおける結束性の検討
3. 学会等名 International Conference on Japanese Language Education 2018（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hatasa, Yukiko & Kazumi Hatasa
2. 発表標題 Examining the Efficacy of Intensive Domestic Immersion in Japanese
3. 学会等名 Bilingualism Conference 2019（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊東 克洋・半沢 千絵美・畑佐 由紀子・横山 千聖
2. 発表標題 日本語母語話者・学習者を対象とした意見陳述コーパスの開発
3. 学会等名 日本語教育方法研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Chiemi Hanzawa, Yukiko Hatasa, Katsuhiko Ito
2. 発表標題 Analysis of concessive expressions in oral opinion statements by native speakers and English-speaking learners of Japanese
3. 学会等名 Canadian Association for Japanese Language Education Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 半沢千絵美
2. 発表標題 中国語を母語とする中上級日本語学習者の意見陳述の表現形式の分析
3. 学会等名 第50回日本語教育方法研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

アカデミック・スピーキング 意見陳述・説明 / 経験談 発話コーパス
<https://ascoe.jp/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	畑佐 由紀子 (Hatasa Yukiko) (40457271)	広島大学・人間社会科学研究科(教)・教授 (15401)	
研究 分 担 者	伊東 克洋 (Ito Katsuhiro) (10805451)	東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・講師 (12603)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関